

# あとわずか…教育実習までにどう学ぶ？

——「量より質」の準備はこんなふう——

法政大学キャリアデザイン学部准教授 筒井 美紀

## 1 不安の原因：「質より量」の勉強方法

本学の教職課程では、4年時の教育実習本番に備えた「教育実習事前指導」は、3年時秋学期に配置されている（英語科はこの限りではない）。この授業に真剣に取り組んでいる者なら、実習時期が迫ってくれば迫ってくるほど、「実習まで、どんなふうに勉強したらいいのだろう？」「このような準備で大丈夫だろうか？」といった不安が高まっていく。そうなる理由は、少なくとも2つある。

1つめは、「実際に実習先で担当する範囲は、4月にならないと決まらない」「担当科目は現代社会だと言われているけど、倫理になる可能性もあるらしい」など、事前指導で取り組んでいる内容や課題が、実際の担当科目・範囲と一致することなど、まずない、ということ。つまり、「教える範囲が決まる前にどんなに勉強しても、ほとんどパーになるのではないか？」という不安がわきおこってくる。

2つめは、「どの範囲を教えるにしても、自分には、基礎知識が全然、足りていない。今から総復習をしても、とても間に合いそうにもない」、つまり、科目全体に関する土台がない、だから積み上がらないのではないか、という不安である。

本論は、みなさんのこうした不安をふまえ、「こうすればいいんだよ」とアドバイスしたい。その内容を一言でいうなら、「量より質」の準備をしよう！である。このアドバイスは、実習の半年前でも3か月前でも1か月前でも1週間前でも、効き目がある。

上記の不安はいずれも、そのもとにある発

想が「質より量」となっている。これではダメである。間違っている。こうした発想の学生は、習得内容が100項目あるとしたら、20個よりは30個、30個よりは50個…とやるのが良い、そうしなきゃいけない、と思っている。「できるだけ多くの知識を覚えておかないと教えることはできない」と思っている。

たとえばある学生は、「私は…教育実習に行く身であるにもかかわらず、恥ずかしながら、社会科学系統の基礎知識が大学教養レベルには達していない…その準備をどれだけすればいいのか、今の時点では見当もつかない。それがとても不安なのである」と述べている。また別の学生は、「日本史の授業では、江戸時代の文化しかやらなかった。なので自分には、他の時代の文化の知識が全然足りない」と述べている。そう、二人とも「質より量」の発想である。だが、これは間違いなのだ。

ではどうすれば良いか。地理を例に挙げる。習得すべき地域が全部で10地域あるとしよう。これらすべてをやる必要はない。たとえば、アメリカ合衆国だけでよいから、じっくり掘り下げるのだ。掘り下げの深さ（深度）が10まであるならば、6から7へ、8から9へと、掘り下げる。「人口密度ってこうやって理解させると面白いんだ」とか「雨温図って、こうやって読み取らせると生徒はぐぐっと興味を持つんだ」など、コツをつかむのだ。

そうすれば、たとえ中国やアフリカについてほとんど勉強していなかったとしても、応用が利く。中国やアフリカの人口密度も気候もアメリカと異なっているが、「人口密度のドキドキする理解のさせ方」「雨温図のワクワク

する読み取らせ方」は、そのまま活用できる。このようにして、コツさえつかむことができれば、異なる地域に関する知識は、実習直前に範囲が決まってからでもマスターできる。これが、「量より質」の準備である。

もちろん著者は、知識量の多いことを否定しているのではない。知識量が多いに越したことはない。こう述べると、「担当教科の教科書は、やっぱり読みとおしておこう」なんて思う学生が多い。大いに結構である。だが十中八九、「なんだか表面的知識しか頭に入ってきていないなあ」と不安になるのがオチである。そりゃそうだ、いわば深度1で10地域を網羅しようとしているのだから。

このことは、歴史にせよ現代社会にせよ倫理にせよ、同様だ。いずれの教科にせよ、「質より量」の発想による準備は、そもそも無理があるし、理に適っていない。したがって、「量より質」に発想を変えることが、まず肝心だ。だが残念なことに、著者が主張している、質／コツとは何かについての理解を「ハズした」ままの学生が大変多い。だから、変えようにも変えられないのである。

なぜ「ハズした」ままなのだろう。原因は2つある。第1は、みなさんの「良い授業」観だ。「要領良く知識を呑み込ませてくれるのが良い授業」と考えているのがまずいのである。第2は、「高校の〇〇先生の授業は面白くて、やる気が出た」などと口では言いながらも、なぜ面白かったのか、知性の力でもって分析できていないこと。「面白かった」「やる気が出た」という感情・意欲のレベルでとまっているのがまずいのである。

本論は次の第2節で、これら2つの原因について詳しく説明する。用いるデータは、著者が担当する事前指導クラスの受講者とのやりとりである。授業中や中間レポートに示された自己分析や意見、模擬実習でのパフォーマンス、中間／期末の学習指導案の中身、それに付された授業への感想などだ。著者は、

受講者の発言や文章のうち、「そんなふうには勘違いしているんだ」「こういう発想だから、指摘内容の理解が深まらないんだ」などと捉えた内容を逐次ノートし、書かれた文章はコピーした。これらすべてが、データである。

続く第3節では、著者が主張している質／コツについてより具体的に説明する。ある私立高校の教員採用試験で日本史の模擬授業をすることになった4年生(Kさん)への、直前リハーサル指導を取り上げる。Kさんが作成した学習指導案と配布プリントを紹介しつつ、著者が伝えたコツについて述べる(大変喜ばしいことに、Kさんは見事合格した)。

なお上述の中間レポートとは、著者のクラスの2013年度受講生に課した2本のレポートを指す。筒井(2011)「実習生はどう見られたか?——「教育実習成績報告書」の初歩的統計分析から——」と筒井(2013)「学習指導案作成:7つの勘違い——「教育実習事前指導」受講生への添削指導から——」である。

本論を読まれているみなさんにも、一読をお勧めする。本論の理解がよりいっそう進むだけでなく、教育実習に行くこととその準備について、根本的に認識が変わるだろう。

## 2 「質より量」の根底にあるものは何か

### 2-1. 「要領良く知識を呑み込ませてくれるのが良い授業」という思い込み

学生の多くは、教師が整理した知識を、生徒に要領よく呑み込ませてあげられるのが「良い授業」だと考えている。だから学生たちは、教材として穴埋めプリントを一生懸命、作ってくる。それをもとに、たとえば、高校世界史で「産業革命の起こり」を扱うなら、次のように(模擬)授業を進めていく。

「今日のテーマは産業革命の起こりについてです。授業は、いま配っているプリントに、キーワードを入れてもらいながら進めますね。

キーワードは黒板にも書くから。じゃあまずは、産業革命の背景からです」。こんなふうにして、「三角貿易」「技術革新」「囲い込み」といったキーワードを入れさせる。

次に、「三角貿易の三角って、どこどこどここのことかな？わかる人？」と問いかけて、「アフリカ＝奴隷／アメリカ＝綿花／イギリス＝織物工場」と答えさせる。「これも覚えてね。じゃあ次、技術革新。糸を紡ぐ機械、布を織る機械、いろんな機械が発明されました。そのなかでものすごく影響が大きかったのは蒸気機関の発明です。蒸気を使って機械を動かす、つまり、自動化したから人間の筋肉労働が減ったんですね。これを発明した人の名前は大事だから覚えましょう。ジェームズ・ワット。9番の四角の中に、その名前を入れてください」……ご丁寧に、穴埋めに入るキーワードを黄色いチョークで板書しつつ、こんな具合に進めていく。

確かに、こうした懇切丁寧な穴埋めプリントは、覚えるべき知識が整然と並べられているので、生徒たちは要領よく呑み込めよう。だが、<このような授業は、ドラえものの暗記パン方式による、生徒を暗記マシーンに仕立て上げるだけの、生徒の精神的成長につながらない、将来の糧にならない授業だ>という趣旨の拙著（2011、前出）を読ませると、みなさんは初めて、自分の思い込みに気づく。

「本論文を読むまでははっきり言って、教科指導において教師に必要なものはどんなに難しい問題にも対応できるほどの知識（すなわち受験勉強用の知識）を生徒にわかりやすく授業することだと思っ込んでいた。」

「私が今まで経験してきた授業形態の9割がたは大事なところは色を変えて書くといった授業形式だった…それはまさに…『自分の居心地のよい形式』だったのだろう。」

「いま振り返ってみると、私は、整理して呑み込ませてくれる授業が好きだった。」

こうした学生の自己分析からは、大学受験をゴールに知識を要領よく呑み込ませてくれる授業が良い授業だと思っ込んでいることがよくわかる。大学受験の社会科は、ほとんどの場合、暗記が勝負なので、いかに要領よく大量の知識をインプットさせてくれるかが、高校時代に最大の関心事となるからだ。

問題は、大学に入っても、教職課程で授業の練習を重ねていても（大学3年生になっても！）この思っ込みから抜け出せていないことである<sup>1)</sup>。口では、「暗記勉強では生徒は飽きる」とか「歴史の学習とは、暗記ではなく物事の因果関係を理解することだ」と言いながらも、抜け出せてない。なぜだろうか。それは、「居心地が良い」とか「好きだ」といった、自分にとってプラスに染みついた感情・意欲は、知性よりもずっと強烈に、あなたの認知を支配しているからである。

要領よく知識を呑み込ませてくれる授業で、学校の試験や予備校の模試でより良い点数をとれたことは、“feeling good”な思っ出として無意識に染みついており、学習指導案を作成するときにも、こっそり顔を出してくる。たとえば、「物事の因果関係を考えさせよう！」と思っしながら世界史の指導案を書いているつもりでも、その、物事の因果関係を暗記させるだけの内容になっていたりする。

自分にとって心地の良い授業だったからといって、それが良い授業であったことには必ずしもならない。この点は、以上の事例とその説明から明らかであろう。感情・意欲の次元でわきおこる「良い good」と、知性の次元で判断される「良い good」とは、全く別のものであり（筒井・遠藤 2013, p.2, 139）、きちんと切り離してふり返りをしなければならぬのである。

## 2-2. 面白かった授業がなぜ面白かったのか 分析できない

いま、「ふり返り」と言った。「ああ、ふり返りなら、いろんな授業でしょっちゅうやっている」と思った読者も多いだろう。だが、みなさんが馴染んでいるこの「柔らかい和語」には要注意である。どういうことか。

著者のゼミの卒業生で、入社5年目の現在、新卒採用・研修を担当している者がいる。彼女は、「伸びない新入社員は、「どの部署に研修に行っても、みなさんが親切でとても感動した」「すごく勉強になったので頑張ろうと思いました」というように、経験を自分の感情・意欲の動きとしてしか捉えられず、「なぜ?」とか「どういうことだろう?」というように、分析的なツッコミを入れることができない」と指摘していた。

この、伸びない新入社員は、自分にとって“feeling good”な思い出を反芻しているにすぎない。つまり、ふり返りが感情・意欲の次元に限られており、知性の次元ではすっかり「お留守」となっている。彼／彼女がなすべきなのは、「部署Aと部署Bのリーダーシップ・スタイルはなぜ違うのだろうか」とか「部署Cの新規事業は展開が早すぎる。隣の部署Dに実は支障を来してはいないか」といった、知性の力による分析である。

みなさんが経験してきた中学や高校の授業についても同様の思考が必要だ。つまり、「高校の〇〇先生の授業は好きだった」「中学の△△先生の授業は集中できた」といった、感情・意欲の次元で捉えられた授業の思い出を、「どのような授業の組み立てが、「好きだ」と思わせたのか」「どのような授業の展開方法が「集中」させたのか」といった知性の次元において捉え直さねばならない（これができなければ、教材研究も授業研究も上滑りのものに終わる）。

このことを、前出の課題レポートから2つ抜粋をして具体的に説明しよう。なお以下で

は、「ふり返り」に代えて、アメリカの教育哲学者 John Dewey が用いた「経験の反省的思考による再構成」という概念を用いたい (Dewey 1938/2004)<sup>2)</sup>。

「思い返してみても記憶に残る先生達はみんなやけに物知りで面白かった。つまり良い教師とは教養のある者なのである。」

この学生は、良い先生に出会えたことが現在の糧となっているようである。ただし、教育実習で良い授業をしたいなら、知性の次元において、もっとツッコミを入れねばならない。なぜ、「やけに物知り」だと「面白」いと感じたのか。そうした知識は、授業のなかでどのように配置されたのか。枝葉の知識と幹の知識は、どのようなタイミングで与えられたのか。こうした分析とその言語化が不可欠なのだ。このような自身の教育経験の反省的思考による再構成こそ、授業の力量を高めるのである。それがなければ、〈ときどき小ネタをはさむと生徒は飽きずに聴いてくれる〉といった、全く自分本位の、表層的な授業をして終わる。

「高校時代に好きでもない地理や日本史に聞き入った時期があった。その答えが分らないでいた。しかし、やっと少し理解することができた。…日本史でたくさん歴史的な分野を学んだ。その時に人の見方が変わり、今の日本の状況と今はすごく恵まれている。そのため、もっと自分のできることを増やし、可能性を広げてみようと考えることができた。」

この学生は、なぜ「好きでもない地理や日本史に聞き入った」のか、情緒・意欲の次元ではなく、知性の次元で分析しようとしている。だが、まだまだツッコミ不足である。「人

の見方が変わ」ったとは、何がどう変わったのか。それは、どんな言葉を聞いたり文章を読んだり写真を見たりしたとき起こったのか。こうした反応を引き起こした授業全体は、どのように組み立てられていたのか。こうした自身の教育経験の反省的思考による再構成によってはじめて、教師として教える力が養われるのだ。それがなければ、〈何か強烈な印象を与える人物や出来事を例に出せば生徒の心に残る〉といった、全く自己満足の、皮相的な授業をして終わる。

「どのような授業の組み立てが、「好きだ」と思わせる（た）のか」や「どのような授業の展開方法が「集中」させる（た）のか」などを具体的に分析しながら、一本でも二本でもいいから、学習指導案を作成すること。それに基づいて模擬授業やそのリハーサルを人前でやってみること。フィードバックをもらい、指導案を書き直すこと。こういうやり方をすれば、「なーんだ、担当教科の範囲を網羅しなくても大丈夫じゃん」と自信がつく。

ここまで読んで、「著者が主張している質／コツについて、だいぶわかった気がする。でも、もっと具体例がほしい」と感じた読者が多いだろう。そこで以下では、高校日本史の模擬授業を事例に説明しよう。後ろの頁に狭義の学習指導案<sup>3)</sup>の一部と配布プリントとを掲載する。以下を読み進める前に、まずはこれらをじっくりと眺め、研究してみてほしい。

### 3 「量より質」の「質」とは何か： 日本史の模擬授業を事例に

Kさんは模擬授業を、蒙古襲来絵巻を掲げて、「これは何の絵でしょう?」と問うことから始めた。私立中堅進学校の1年生が対象なので、「元寇」という答えはきっと返ってくるだろうという想定のもとに、「そう、元寇だね。今日の授業では、『なぜ鎌倉幕府は滅亡したのか?』というテーマを、元寇と結びつけて考

えていきたいと思います」とつなげた。

ここで「テーマ」とは何かを説明しておく。学生に「あなたの卒業論文のテーマは何ですか?」と訊くと、「〇〇についてです」と答える者が多い。だが、これは大変つまらない。相手の興味を惹きつけない。ではどうするか。真偽、善悪、賛否など、議論を引き起こすのだ。“Theme is argument.”すなわち「テーマとは議論である」。したがって、テーマは疑問形で表現できる。授業者は、その授業全体を包み込む問いを設定する必要があるのだ<sup>4)</sup>。

話を戻すと、Kさんは、元寇の詳しい説明をいきなり始めたわけではない。蒙古襲来絵巻を眺めながら、気がつくことを何でも言ってみよう、と、導入にたっぷり時間をとっていた。生徒（役の著者など）の発言に対しても、「ふーむ、なるほどね」「ああ、それも言えてるねえ」「この、後ろにある物体は何だろう?」など、実にのんびりした口調（訓練の賜物だ）で返していた。

このようにして、元軍と日本軍の戦法を対比させた上で、文永の役や弘安の役、沿岸防備の強化について要点を説明し、続いて元寇の恩賞に対する御家人の不满、永仁の徳政令へとつなげていく。そして最後に、導入部分で掲げた「なぜ鎌倉幕府は滅亡したのか?」というテーマに対して、各自の解を文章で書かせて締める。

歴史の出来事には必ず理由や背景があることを理解させ、それを自分の言葉で書かせる工夫がなされていると同時に、難関大学を目指す生徒が多いことを踏まえた試験に即した内容にもなっている。よくまとまった、生徒を能動的に学ばせる指導案である。

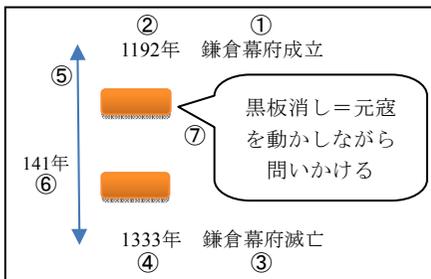
ただし著者なら、次のように変える。紙幅の都合上、1点だけ述べる。それは、本日のテーマ設定と、それに続く問いかけである。

「そう、元寇だね。今日の授業は、『元寇は、鎌倉幕府の滅亡にどう影響したのか?』というテーマでやっていきたいと思います。

いま滅亡っていったけど、鎌倉幕府が始まったのって、いつだっけ？ そうそう、窓側の一番後ろで声がしたね。いいくに（=1192）つくれた頼朝さん。じゃあ、滅亡はいつ？ あれ、これは手が上がらないね。うまい語呂合わせがなくて、覚えにくいんだよね。実は、1333年です。

そう、鎌倉幕府は1192年から1333年まで続いた。じゃあ、この間は何年かな？ お、A君、計算が速いね。そう、141年。

じゃあ、元寇っていつ起こったの？ 鎌倉時代の前半？ 後半？ 終わりごろ？



※①～⑦は板書などの順番

つまり何が言いたいかというと、元寇が鎌倉幕府の滅亡に影響したんだ、といっても、どんな原因と結果が、どれくらいの時間幅でつながっているのか？を計算しながら考えなくちゃいけないよね、ということです。」

下手をすると生徒は、<元寇→御家人の不満上昇→徳政令で惣領制の動揺→幕府崩壊>という因果関係を、それこそ暗記して終わってしまう。けれども、上述のような問いかけをしておくと、1274年に文永の役、という知識が出てきたときに、生徒は  $1274 - 1192 = 82$  と計算して「鎌倉幕府が成立してけっこう長い時間が経ってから元が攻めてきたんだ。幕府成立5年後なんかだったら、滅亡はもっと早かったかも」とか、 $1281 - 1274 = 7$  と計算して「元が再び攻めてくるまでに7年も空いたんだ。いつ攻めてくるの？と不安だったろうな。でも、もう攻めてこないかも、と防

備に気が緩んだかも」とか、 $1333 - 1281 = 52$  と計算して「元寇が幕府の滅亡に影響したといっても、半世紀もかかっているんだ。この間には、他にも原因が重なって、幕府滅亡につながるんだな」といったように、社会の出来事と人間の心理における時間的要素の重要性に、考えをめぐらすことへと生徒をいざなう。歴史の因果関係を捉えるさいには、時間幅に気をつけるとぐっと面白くなる、という発見に至らせるのである。

Kさんの指導案には、「年号は歴史の流れの理解に重要であることを伝え」とある。だが、生徒にただ「重要ですよ」と言っても、語呂合わせを付けて面白くしても、その重要性は生徒の内側には沁みていかない。手を動かし実際に計算してみる。それが思考を刺激し、年号の重要性は自ずと沁みていくのである。

## 4 結論

<歴史の因果関係は、時間幅を計算しながら捉えさせ考えさせよ>というこのコツは、どんな時代でも、日本史でも世界史でも、中学でも高校でも、応用できる。Kさんは、たまたま、元寇とその影響という小単元で、このコツを習得したのだ。

繰り返せば、単元は限られていてもいいから、こんなふうに深く掘り下げることが肝心である。これが、「量より質」の実習準備だ。

時間が足りないのは誰でも一緒である。だが、そこで焦らず、進んでいないように思えても、我慢して一カ所を深く掘り進めるような学び方ができるか。そこが勝負である。

## 注

- 1) 要領よく呑み込ませてくれるのが良い授業という思い込みは、教職課程履修者のみならず、大学生全体にとっての問題である。

この点は筒井（2014）を参照。同書は、大学生向けの新書であり、本物のリテラシーを身につけるには、どういう発想の転換と努力のコツが必要かを論じている。

- 2) 同書で Dewey は、児童・生徒がより独創的な知性を生み出していくのは、その個人的（生活）経験を反省的思考によって再構成することをとおしてであり、これを促す学習環境を整え、児童・生徒を支えていくのが教師の役割だ、と強調している。

この、知的エネルギーの多大な放出を要する役割は、まずは教師（教育実習生）自身が、自分が受けてきた教育経験を、反省的思考によって再構成するという動作ができない限り、本当には果たせない。だが、事前指導の受講生たちをみていると、この動作がなかなかできないのである。

「先生のあの質問で、もっと考えたくなかった」「あの授業で、忘れたい観点を刻み込まれた」「とにかく政治経済には興味が持てない」「あの授業で、突如、地理が嫌いになった」——みなさんは、こんな授業経験を、小中高で、そして大学で、たくさんしてきているはずである。

ところが、こうしたことがなぜ・どのように生じたのかを、自己の内部に他者の視点（客観的視点）をつくって観察・分析・考察することができてない。そのために、「主体性の尊重」「生徒目線に立つ」といったスローガンを唱えて“feeling good”になりつつ、「生徒を過去から伝わる教材に効率よく結びつかせるための代理人」や「知識や技能が伝達され、また行為の規則が強要されるさいの仲介者」（Dewey, 前掲書, 邦訳 p.18）に陥っている。「昔の自分」を忘れて、教え込みをするだけの授業者になってしまっているのだ。

- 3) 学習指導案には、「狭義」と「広義」の二つがある。狭義の指導案とは、67 頁に掲げたように、1 回 1 回の授業をどのように

展開するかについて詳細に記したものである。これに対して広義の指導案とは、その授業を実施する学校・学年・学級や生徒観、単元の全体像と到達目標、そのなかでの本時（小単元）の位置づけなどについて述べたものである。言うまでもなく実習生は、両方の指導案を作成することが求められる。

- 4) K さんは、著者のクラスの 2012 年度受講生であり、“Theme is argument.” を大事にした授業づくりを学んだ。だから、このような指導案が書いているのである。

#### 引用文献

Dewey, John (1938/2004) *Experience and Education*, 『経験と教育』市村尚久訳、講談社学術文庫。

筒井美紀 (2011) 「実習生はどう見られたか? —— 「教育実習成績報告書」の初歩的統計分析から——」『法政大学教職課程年報』VOL.8, pp.73-81.

筒井美紀 (2013) 「学習指導案作成：7 つの勘違い—— 「教育実習事前指導」受講生への添削指導から——」『法政大学教職課程年報』VOL.10, pp.88-97.

筒井美紀 (2014) 『大学選びより 100 倍大切なこと』ジャパンマシニスト社。

筒井美紀・遠藤野ゆり (2013) 『教育を原理する——自己に立ちかえる学び』法政大学出版局。

「元寇と鎌倉幕府の滅亡」を取り上げたKさんの学習指導案（一部）

	学習内容	生徒の活動 (学習内容・活動)	教師の活動 (発問・指示)	指導上の留意点	評価・観点
導 入	元寇	<p>黒板の蒙古襲来絵巻を見る。 予想される解答</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 元寇、蒙古襲来絵巻</li> <li>2. 元寇とは、元が日本に服属要求をしたが拒否され、日本に攻め入ったこと</li> </ol> <p>空欄①の解答「蒙古襲来絵巻」をプリントに書き、間違えやすい漢字「蒙」と「襲」に赤丸を付ける</p> <p>絵巻を元に、元軍と日本軍のそれぞれの戦法をプリントの空欄部分に書く。</p> <p>指名された生徒は解答する。</p>	<p>黒板に蒙古襲来絵巻を貼る 中学の復習 発問 1「これは何の絵？」 発問 2「元寇って何？」 蒙古襲来絵巻を元に、生徒の解答と共に振り返る。</p> <p>テーマ発表「なぜ鎌倉幕府は滅亡した？—その1—」 (板書・口頭) 「今日の授業は、鎌倉幕府滅亡を、元寇の側面から捉えていく」</p> <p>プリント配布</p> <p>空欄①の解答「蒙古襲来絵巻」を板書し、間違えやすい漢字「蒙」と「襲」に赤丸を付けさせる</p> <p>絵巻を元に、元軍と日本軍のそれぞれの戦法をプリントの空欄部分に書かせる。</p> <p>書き終わったところに生徒を指名し、解答を板書して生徒と共有する。</p>	<p>中学の学習で既に見覚えのある蒙古襲来絵巻から、本日の学習内容に対する関心を高める。</p> <p>最初に蒙古襲来絵巻を見せていることから、本日のテーマとの関連を考えさせる。</p> <p>間違えやすい漢字に赤丸を付けさせ、試験時の漢字ミスを防ぐ</p> <p>黒板ないしプリントの絵巻から読み取るように促す。資料から考える力を育む。</p>	関心・意欲・技能・表現
展 開	文永の役		<p>○文永の役の説明 「元は日本に2回、攻めてきた。一度目の襲来を『文永の役』という。」 空欄②の解答「文永の役」を書き、プリントに書くように指示。 「1274年の語呂合わせ(生き残る者いちにんなし)」 再びプリント上部の蒙古襲来絵巻を見るように指示し、元軍のてつほう(鉄砲)と集団戦法に日本軍が苦戦したことを、プリントの解説に付け加える。</p>	<p>集中力を切らさないように、重要箇所書き込みは積極的に促すようにする。 年号は歴史の流れの理解に重要であることを伝え、語呂合わせを紹介する。</p>	知識・理解
【以下省略】					

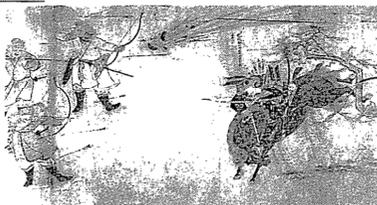
本日の Question

### なぜ鎌倉幕府は崩壊したのか？～その1～

#### 1. 元寇

チングスハンがモンゴルを統一。フビライハンが国号を元と改め、日本に服属を要求。

①



竹崎季長  
(肥後の御家人)

元軍の戦法

日本の戦法

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

② \_\_\_\_\_ (1274年)

…元・高麗軍約3万が博多に来襲。暴風雨で元軍撤退。



③ \_\_\_\_\_ を整備

…元軍が再び攻めてきたときに備えて設置した、海岸での見張り番役。

④ \_\_\_\_\_ を設置

…防護用の堤防。



元が南宋を滅ぼす



⑤ \_\_\_\_\_ (1281年)

…2度目の来襲。元軍に加えて、南宋の軍隊と高麗の軍隊。

⑥ \_\_\_\_\_ …朝鮮半島から来襲。(元・高麗軍) 約4万

⑦ \_\_\_\_\_ …中国本土から来襲。(元・旧南宋軍) 約10万

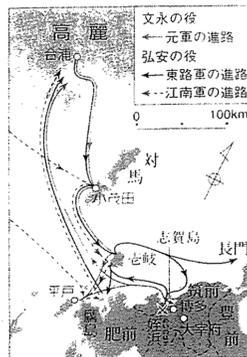
⇒またも暴風雨で元軍退却。

神風が日本を守っている(神国思想)

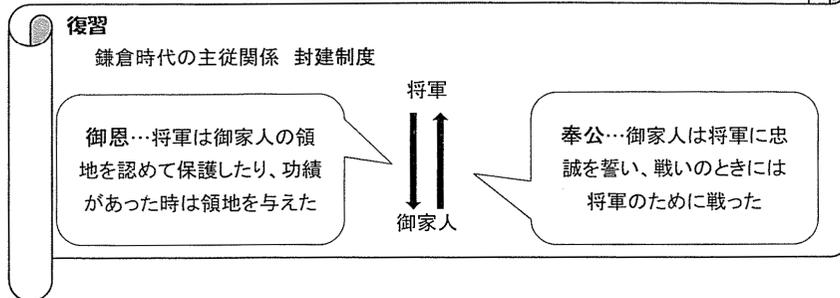


⑧ \_\_\_\_\_ の設置。

…次の来襲に備えて整備した、九州統括のための機関。



2. 恩賞不足...そして永仁の徳政令



元寇によって御家人に対する不満が高まった理由は？

⑨ \_\_\_\_\_

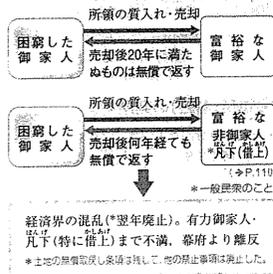
⑩ \_\_\_\_\_ (1297年)

...御家人の貧乏を救済するために執権北条貞時が出した法令。

**資料 類出!!**

**関東御事書の法**  
一、質券売買地の事 永仁五年三月六日  
右、地頭・御家人の買得地に於ては、本主は取返すに及ばず。非御家人并びに凡下の輩の買得地に至りては、年記(紀)の遠近を謂はず本主は之を取返すべし。  
①質券売買地 質入れや売却された土地のこと  
②買得地 買い取った土地 ③本条 御成敗式目の規定  
④本主 元の所有者 ⑤非御家人 御家人以外の武士  
⑥凡下 庶民。ここでは借上 ⑦年記 知行二〇年

- ①越訴(再審を求めること)を禁止する
- ②質券売買地(質入れ・売却された土地)について(下図、及び右下史料)
- ③金銭の貸借に関する訴訟は受理しない



所領の売買、質入れ禁止の部分の批判が多く、撤回。

分割相続による所領細分化⇒単独相続  
血縁の結合(惣領制)⇒地縁の結合



本日の Answer

鎌倉幕府は、 \_\_\_\_\_ 崩壊した。